The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦前期に印刷された日本製ポスターに見られる印行名と製作年代の関係について
Author(s)	田島, 奈都子
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53136
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

戦前期に印刷された日本製ポスターに見られる印行名と製作年代の関係について

田島奈都子／姫路市立美術館

研究の発端

わが国の戦前期に印刷されたポスターには，ほとんどの場合，画面の下方に印刷を担当した会社を示す文字や「印行名」と呼ばれるモノグラムがある。そして，それらはよく見ると，同一会社であっても必ずしも同じでないことがしばしばある。これらのことから，筆者はポスター上に見られるそれらの情報から，ポスターの製作年代を特定することがある程度可能ではないか，との仮説に至った。

戦前期の印刷会社にとってのポスターと印行名

戦前期の印刷会社にとってのポスター印刷の受注は，それが大量であっても必ずしも利益率の高い仕事ではなかった。なぜなら，当時の関係資料によると，特に関西圏ではポスターのような消耗性の高い広告に費用をかける広告主が東京に比べ少なかったようであり，一方，当時の国内の製版・印刷業は，機械化や技術が年々進歩したとはいえ，人手に頼る部分も多く，ポスターや絵画の複製に用いられる多色印刷を美麗に仕上げるためには，膨大な時間と優秀な職人を要したからである。

それでもなお，印刷会社がポスター印刷を手がけ，かつその精緻さを競った背景には，経済活動が活発化する中でポスターを筆頭に広告全般に対する関心が高まり，広告主がより美しいポスターを望んだこと，そしてそれ以上に，片隅とはいえポスターの表面に，社名やそれを印刷するのに用いた技術を表す情報を，文字やモノグラムで入れられたポスター自体が，自身の技量を示す格好の広告媒体としても機能したからにほかならない。

日本精版印刷合資会社と同社の印行名の関係

今回，筆者が着目した印刷会社は1905年に大阪に創業した日本精版印刷合資会社である。同社は明治から昭和戦前期を通してポスター印刷で名を馳せた印刷会社であり，その代表作例としてはサクラビール，麒麟麦酒，大日本麦酒関係，月桂冠，高島屋，大阪商船，足利銘仙等のポスターが挙げられる。また，その活動を概観してみると，新興印刷会社でありながら，その後は大阪市内の同業他社を次々に吸収合併し，事業を拡大，国内ばかりか現在の中国，シンガポール等にも営業拠点を設ける等，かなり精力的であった。

さて，現在確認できている同社の社名の入れ方や印行名の種類は10種類以上になるが，そのうち代表的な11の印行名と同社の社史を対照させてみると，そこには興味深い相関関係が認められる。

まず，１番目は合資会社時代のものである。これは創業時から使用され，1916年７月にアルモ印刷合資会社を吸収合併し，日本精版印刷株式会社となったことにより，２番目が登場するまでの間使用された。この２つは日章旗を思わせる放射状の太陽の中心に精版の「精」の文字を入れ，それを取り囲むように社名を配するもので，デザイン上はそれほど変化がない。

３番目は1921年９月の上海工場の操業開始，およびその約半年前に案出されたＭＣプロセス写真製版法を併せた名称の入れ方であり，４番目は1923年７月に大阪市内に所在した市

田オフセット印刷株式会社と合併し，社名が精版印刷株式会社に変更になったこと，およびこの合併により市田が取得していたＨＢ製版の特許権と機械が新会社の所有物となったことを受けて用いられるようになった。ちなみに，３番目と４番目は基本的に文字組のみで形成されており，現在確認できている作品からは，前者が1921～22年，後者が1923～24年に使用されていたようである。

半円とその下に大中小と３つの長方形を組み合わせた５番目の印行名は，1925～26年に使用され，その後ほぼ踏襲されることになるかまぼこ型の外形に，「ＨＢ」の文字と社名を入れた印行名の初代となる６番目は，1926～28年初めまで使用された。

６番目よりもややなだらかなかまぼこ型となった７番目は，1928年３月に本社兼工場を西淀川区に新設，移転したのを期に用いられるようになり，作例としては1931年分まで確認できている。８番目と９番目は，７番目には全く存在していなかった地名が復活し，それぞれ大阪，東京と入れられている。なお，前者の作例としては1932～34年，後者の作例としては1934～35年のものが確認できているが，この２つは「対」である可能性が高く，同時期に使用されたものと思われる。

10番目は1932～39年，11番目は1936～39年の作例に見られ，それぞれ使用期間が長く，重なっていることから，印行名によるポスターの制作年代の絞り込みは難しいといえる。

なお，精版印刷株式会社は1944年８月に凸版印刷株式会社に吸収合併され，会社自体は戦前期で終焉を迎えている。

結論及び今後の課題

このように，日本精版印刷合資会社に関しては，社名の表記と印行名の変遷から，ポスター自身の製作年代の絞り込みがある程度可能となることがわかった。もっとも，ポスターの制作年代の正確な特定については，広告主や広告対象となっている商品やサービスの名称，およびそれらが存在していた期間に関する情報等を併せて精査する必要があり，印行名だけで制作年代を簡単に特定することは，できるだけ避けた方が良いと思う。

ただし，社歴が長く，広告活動に積極的であったがゆえにポスターの制作数が多い企業や，ロングセラー商品のポスターの制作年代を特定することは，広告主が現在でも営業している場合においてもさまざまな理由から難しく，まして，社史が編まれたことなく廃業してしまった企業や団体のポスターに至っては，制作年代に限らず，ポスターに描かれていることに関して，全く手がかりがないことも少なくない。そうした現状を踏まえるならば，ポスターに記された印行名は，ポスター自身の制作年代を特定する一つの物差しとして非常に有効であるばかりではなく，その精度が向上した際には，逆説的ではあるが，現在では情報の乏しい広告主や商品がいつ存在したかを知る手がかりにもなり得ると思う。

今後とも，筆者は日本精版印刷合資会社に関する印行名とポスターの制作年代の相関関係をより明確にするために，引き続き作品調査を行うつもりであり，また，平行して戦前期に存在した他の印刷会社についても印行名の調査を行い，同社と同様の傾向が見られるのかどうかを見極めたいと考えている。そして，印行名の解析とその活用方法についての研究を進め，戦前期に制作されたポスターの資料的価値の発見と向上に貢献したいと思う。